

釧路湿原自然再生協議会
第 16 回再生普及小委員会
議事要旨

平成 22 年 11 月 30 日開催

■ 再生普及行動計画ワーキンググループの経過報告について

事務局より再生普及行動計画ワーキンググループの経過報告が行われた。本年度の取組みの進捗状況とワンダグリンドプロジェクト 2010 の中間報告及び来年度の予定について説明があり、その後協議が行われた。

委員

- 8 月に、再生普及行動計画 WG で取組んでいるフィールドワークショップで、旧川復元事業の蛇行箇所を案内した。実際に再生の効果を体感する目的だったが、直線河道時代に堆積した土砂と復元後に堆積した土砂の様子を比較出来る箇所に赴いたので、参加者の方々も理解しながら観察しており、有意義であったと感じる。

委員長

- そもそもフィールドワークショップを実施する目的が、委員会や WG のメンバーが自然再生の現場に行き実際に触れる機会を作るということであるので、今後もより多くの方の参加を期待したい。
- 知名度アンケートの結果を見ると、自然再生や釧路湿原についての認識度は高くなってきているように感じる。自分の出来る範囲内で、自然再生に参加するような時代の流れになっているのではないか。
- ワンダグリンドプロジェクト 2010 では、以前に比べ多方面の団体や個人の方に参加していたが、今後も多くの活動団体や個人の方々に参加してもらえるようなきっかけやプランを考えたい。

■ 環境教育ワーキンググループの経過報告について

事務局より環境教育ワーキンググループの経過報告として、今年度の取組みの進捗状況を報告され、その後協議が行われた。

委員長

- 環境教育ワーキンググループは、学校教育の中で環境教育を実践するための指針づくりをしてきたが、学習指導要領の中で総合学習の時間が縮小されている昨今では、湿原や自然再生などの環境教育をテーマにする学習自体が減っている。このような中で、理科や社会などの個別の教科に、環境教育との関連性を持たせて取り組む可能性を見いだしたい。

委員

- 小中学校はわからないが、高校では、特に標茶高校は総合学科で科目の設定がしやすいため、環境教育を取り入れやすい。「湿原の科学」という教科を既に設けており、水質調査の方法などを教えている。環境を学んだ上で、自分たちが住んでいる地域を誇りに思う大人になってほしい。一方で、英語や数学などの時間が減ることで受験対応が遅れるということがないように調整するのも大変ではある。

委員長

- 高校では、環境教育を総合的に運用するところが少しずつ増えている。学校や地域の特徴を活かして生徒に指導することができるが、小中学校では難しいか。

委員

- イベント的なことでは、9月に標茶高校の生徒が小学生を対象に環境学習会を開いた。日常の教科の中では、例えば、算数の中で湿原の面積を使って引き算を教えるということなどは、可能ではないか。
- 本校でも問題になっているが、異動などで教員が変わると指導方針やスキルがリセットされるので、何か一本筋の通った環境教育の方針を作らなければならない。

委員長

- 標茶町の観光振興課では、子ども達への副読本などに関わっていないのか。副読本には、自分たちが生まれ育っている地域について詳しく認識を持ち、郷土を誇りとしてほしいという目的がある。

委員

- 観光振興課では、基本的に、町外や道内外の方に釧路湿原を含めた標茶町に来ていただくための発信がほとんどであり、現在のところ、小中学生を対象とした副読本の作成には関わっていない。
- 町や教育委員会、各学校での環境教育の取り組みはある。例えば、釧路開発建設部の協力により「水辺の学校」を開き、各学年に対応した環境教育に取り組んでいる。

委員

- 学校教育に関してだが、釧路湿原やタンチョウ、湿原再生事業を紹介する内容を、千葉や東京の英語の教科書に載せている。あるところでは、算数の問題にタンチョウとヒナの割合などが出ている。このようにアプローチは既にある。

委員長

- 英語や外国語の教科書には流行があり、現在は、環境問題を取り入れるようになっている。是非、タンチョウや釧路湿原などを取り上げてほしい。
- 教員研修講座の実施状況についてはどうであったか。

委員

- 環境教育ワーキンググループと釧路市釧路教育研究センターの連携で、再生事業地における教員研修が行われた。講座の講師を努めたが、昨年は釧路管内の新採用の先生が主で20名が参加され、今年は開催時期として学校が忙しい時期だったようで、1回目が6名、2回目が7名でベテラン先生などが参加されていた。

委員長

- 参加者の感想を見ると、参加して大変良かったなど積極的な回答が多かった。参加人数は多くはないが、是非来年以降も続けて欲しい。あと、講座の名前から講座内容がわかりにくいという話もあるので、講座名や時期にも多くの先生が参加できるような工夫が必要と考える。

委員

- 釧路湿原ふれあいセンターでは、北海道釧路教育局との連携で、釧路管内に今年採用された教員76名の初任者研修のプログラムの一部を担当した。標茶厚岸の国有林にあるパイロットフォレストを中心に森林環境教育の体験学習として、間伐作業や枝打ち、苗木づくりなどの作業を体験していただいた。参加者の感想として、子供たちにも紹介したいとか、他の先生方にも伝えたいというような意見もいただいた。
- 来年度も是非この研修に組み込んでいただきたいと働きかけている。

委員

- 地域のことを伝える学習のなかで、意識づけをどうやって子供に沸き起こさせるかということが最大の課題である。自分では、実際に湿原に踏み入った時に初めて湿原を実感したという経験がある。子供たち自身に滲み込むような次元の教育活動が必要と感じる。

委員

- ヨーロッパでは「森の幼稚園」という幼児教育の取組みがもう30年も前から一般的であった。日本まだまだその様なカリキュラムはない。小中高校のカリキュラムは、要綱に沿って授業が立てられており、その中に湿原の環境教育を入れていくには中々難しい所もある。しかし、幼稚園や保育園は縛りがないため、湿原に行ってもらう取組みなどは取り上げてもらいやすいのではないかと。機会を与えてあげると、一緒に同行する先生方にも、また、もしかしたら父母やおじいちゃんおばあちゃんも一緒に行くと喜ばれると考える。

■ 情報発信のあり方について

事務局より再生普及行動計画ワーキンググループで取り上げられた情報発信のあり方に関する取り組みの経過報告が行われ、その後協議が行われた。

委員

- 11月に行われた第19回再生普及行動計画ワーキンググループの会議の中で、双方向の情報発信を考える時期に来ているのではないかという話があった。効果的な情報発信のあり方に関する意見交換の中で、新聞に掲載してもらうことが挙げられた。日本経済新聞の「私の履歴書」で湿原に関わっている人たちを紹介するという積極的なお話があったこともあり、私と湿原とか、私にとっての自然再生というコラムを考えてはどうかという議論もあった。

委員

- 情報発信の仕方として、農業関係で言うと近頃「農ギャル」と呼ばれる若い女性がマスコミに取り上げられ、情報が出されていき、さらに業界を元気づけるということもあるようである。自然再生に関してもこの様な取組みを作っていけないかと思う。また、アニメのようなものも活用して広げていけないのではないか。

委員

- 日経新聞で湿原に関わっている人を紹介するという事で、その影響の広がりには期待できる。英語の教科書に釧路湿原が取り上げられているという報告があったが、北海道でも是非進めるべきである。

委員

- 釧路に来た観光客のブログでは、ただ単に湿原展望台に行きましたというのが多い。しかし、湿原や河川の再生には理解がないようなので、何故そういう事が必要かということをお我々が言わなければならない。

委員

- 情報発信をする基本的な部分、つまり誰に向かってどういうタイミングで情報発信をするかということも練り治す必要があると思う。

■ 再生普及に関する5年目の施策点検について

事務局より5年目の施策の点検について説明が行われた後、協議が行われた。

委員

- 再生普及小委員会では、取り組む課題が大きいので大変であると承知している。しかし、点検案を拝見したところ、わりと曖昧なままで点検が終わっていると感じた。順調に進んでいるところと順調ではないところをもっと具体的にしてもいいのではないか。
- 全ての課題を解決するには5年や10年では無理だと思うので、何が最も重要なのかということを出していかないといけないと考える。
- 全ての項目について数値化して点検するとなると難しいと思うが、例えばカヌー利用のガイドラインについて、作成後にどれ程知れ渡っているか、運用されたのかがよくわからないと

というようなものもあり、順調なところとそうではないところを具体的に出したほうが良いと感じた。

委員

- ゴミの量の減少傾向の結果が出ているが、湿原でゴミを集める取組みをする団体の一つとして、確かにゴミの量が減っていると感じる。実際に毎年少しずつ場所を変えながら実施しているが、ゴミを集める場所をもっと大胆に変更した方が良い時期に来ていると感じる。
- 釧路市の広報誌である「広報くしろ」の12月号で、みんなの掲示板のコーナーにワンダグリンダプロジェクトの事が載っていた。スペースの制約などがある中でも載った事自体は大変良かったと感じた。

委員長

- 標茶町と釧路町の広報にも掲載させてもらったり、各市町村やその他行政機関のHPなどにリンクを貼ってもらうという働きかけもしており、徐々に成果が現れるかと思っている。

委員

- 5年間の振り返る時に、いつも最初の自然再生事業が始まったところに戻って、一つ一つの活動が今どのような位置付けにあるか、どの部分は上手く進んでいて、どの部分は上手くいっていないとか、社会状況が変わってきたので、ここはこういう風に変更して行ったとかがわかるような視点も必要と考える。

委員

- この点検結果では、ワンダグリンダの話ばかり出てくるが、他の小委員会の部分も入れる方が良いかと考える。

事務局

- この点検については、各小委員会で関連する施策について点検を行い協議会に報告することになっている。

委員長

- 点検結果の報告は、12月の協議会に報告するという予定であるが、今日の意見や指摘を受け入れながら振り返ることが重要と考える。5年間分の点検をあわてずに時間をかけて行い、12月の協議会ではこういう風に点検を進めていますという報告をするのが良いと考える。

委員

- 点検内容について謙虚な意見が出ていたが、私は非常によくやったと感じている。例えばロゴの作成やカヌーの利用数の調査など。5年という短い中であって、ずいぶん取り組んで来たという所も是非強調していただきたい。

■ 今後の予定

事務局より今後の予定について説明が行われた。

事務局

12月14日に釧路湿原自然再生協議会が開催される。その後、ワンダグリンダプロジェクトの2011年の取組みを募集していく。冬期にフィールドワークショップを開催し、来年4月頃に再生普及行動計画ワーキンググループの開催を予定している。環境教育ワーキンググループについて、来年1月下旬と4月に開催を予定している。次回の再生普及小委員会の開催は来年5月頃を予定している。